

茶の湯文化学会会報 No.29

第29号/2001年5月17日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314
http://www2.ocn.ne.jp/~chanoyu/ e-mail chanoyu@oregano.ocn.ne.jp

二〇〇〇年一月十七日、エッフェル塔にほど近いモダンな建物、パリ日本文化会館で「萩焼四〇〇年展」は開幕した。

この展覧会は萩焼四〇〇年展実行委員会（山口県・萩市・山口市・長門市・朝日新聞社）と国際交流基金の共催で開催されたものである。その内容構成は江戸時代から現代までの萩焼一―三点を、近世、近代、現代の三章にわけて展示したものである。萩焼がこれだけまるとまると海外で展示されるのは初めてのことであり、展覧会の構成にたずさわったものとして、いくつかのねらいを込めた。まず第一は萩焼を茶陶という枠に閉じこめずに、花器などの大型の器や置物などを含めて、総合的に見てもらおうとした。とくに、置物は海外を意識し、従来の萩焼展では数点を添えもの的に紹介するにすぎなかったものを、約二〇点そろえたこととは特筆しておきたい点である。

パリ日本文化会館はヨーロッパにおける日本文化紹介の拠点として、一九九七年五月にオープンしたもので、大小二つのホールに展示ホール、茶室などを備えた総合施設である。展覧会はこの展示大ホールを使って開催された。

パリの「萩焼四〇〇年展」

榎本 徹

展示は現地スタッフとともに順調に進んだ。ここで思いがけなかったのは、会館にはホールがあり、舞台専門の照明スタッフがいたことである。彼らが置物の照明を、まるで舞台の俳優にスポットを当てるがごとく、丁寧に、そして効果的な照明をしてくれたのである。これは美術館ではなかなか出来ないことで、細かい注文に見事に応えてくれた彼らの仕事ぶりはいまでも忘れられない。

いよいよ開会式である。パリ日本文化会館でのオーピングは、まず新聞、雑誌の記者などプレス関係者だけの内覧会から始まる。その二時間後には招待者の内覧会、さらにレセプションと続いた。会館としてはプレス関係者の内覧を重視しており、説明役をおおせつけた者として緊張せざるを得なかった。さいわい会館は、日本文学研究のエキスパートを通訳として付けてくれた。そして、この人に大いに助けられた。

記者からの質問はどれも鋭いものであった。質問の初めはほとんどの記者が「萩焼を見るのは初めてだが」との言葉がついた。

最も答えるのに時間がかかった質問は、「萩焼と楽焼の違いを述べよ」というものだった。これは、同じ

パリ日本文化会館で三年前に「楽焼展」が開催され、それを見た上での質問だった。私はこれに利休好みと織部好みの違いと答えた。利休好みの静かで佗びた長次郎から出発した楽に対し、萩焼はその創業時の毛利家の輝元や秀元が古田織部と親しく織部好みのスタイルから出発したこと、とくに織部好みの高麗茶碗である割高台、御所丸、彫三島などと関連があり、造形的には杵形など口部を作意的に歪ませてあることがその大きな特徴であることなどを述べた。

江戸時代前期の萩焼、とくに茶碗は織部好みからくる変化のある動的な造形力と土の質感を生かしたことがその特徴で、伊万里のように絵付けを主体とした焼き物ではないことも強調した。これに対し、ある記者から、それではこの絵はどういうことかと、ある作品を指摘された。それは割高台茶碗であった。そこにはたしかに赤い文様がかった。しかしそれは絵付けではなく、割れたものを修復した、いわゆる赤漆の継ぎであった。その記者には、これは破損したものであり、茶の湯では、修復した跡もかくそうとせず、見所の一つとして楽しむということがあると話した。これにはかなり驚いた様子で、我々ヨーロッパ

人は、修復のあとには目立たないようにするのが一般的であるので、そのような考え方は大変興味深いということであった。

会場全体の雰囲気も活気があり、記者も丁寧に展示を見てくれた。予想したように置物は多くの人たちに興味深く受け入れられた。ヨーロッパのフィギア・ポースレンとの連想がスムーズに働いたようだ。ただある女性が、「置物は面白いが、退廃的な感じがする」と感想を語っていたのにはこちらが驚いた。たしかに置物の大部分は文化文政期から幕末にかけてのものであり、そのような感想もあり得ると、これはこちらも納得せざるを得なかった。

無事レセプションまで終了し、後日パリ日本文化会館から翻訳付きで記事が送られてきた。フランスを代表する新聞「フィガロ」、美術雑誌として知られた「ユネッサン・デザール」に取り上げられたことは大変ありがたかった。内容はいずれも好意的であったが、萩焼の創業に対しては「フィガロ」が「破廉恥な政治の歴史。李兄弟のような朝鮮半島に古くからあった焼き物の技術者が、意志に反して日本に連行されて創始した」という歴史認識を示していたのを見逃すわけには

いかない。文化の問題とはまたすぐれて政治的な問題でもあることをしっかりと意識した上で取り組むべきことを、あらためて指摘された思いがした一行であった。

「萩焼四〇〇年」展の帰国展示は、六月十六日から七月二十二日まで、山口県萩市の山口県立萩美術館・浦上記念館で行われます。

平成十三年度第一回理事会

平成十三年四月二十五日（水）午後六時より、池坊短期大学第二会議室において本年度第一回の理事会を開催した。出席者は理事十二名。

中村会長の挨拶の後、赤沼理事より決算報告、倉澤副会長より事業報告があり、赤沼理事から監査報告がなされ異議なく承認された。谷理事よりインターネットのホームページについて現状報告があった。

次に倉澤副会長より十三年度の事業案の説明があった。総会は五月二十七日（日）に池坊短期大学で開催し、樂吉左衛門氏の講演会を併催する。大会は秋に東京で開催、研究会は第十五回を八月下旬に京都の相国寺で、第

十六回を唐津市の名護屋城博物館で開催する予定である。近畿例会は例年通り二、三回開催し、シンポジウムと研究発表を予定、東京例会は五月二十六日、七月二十八日、九月二十九日、十一月十七日を予定、高知例会は昨年度と同じく隔月で開催、会報は例年通り四回発行し、会誌は第九号を刊行する予定である。

続いて赤沼理事より予算案について説明があり、十三年度事業が確定していないため事業費もあくまで目安であるとの付言があった。予算案については総会前にもう一度理事会を開いて承認を得ることになった。

また、小泊理事より今年秋に静岡で開催される「世界お茶祭り」について説明があり各方面からの参加をお願いしたいとの要望があった。

次に役員改選について中村会長より、今回の任期中に次期会長を決めるにあたりどうしたらよいか理事の方々のご意見を参考にして熟考した結果、新会長が副会長を指名するのがよいと判断し、次期会長に倉澤洋氏を推挙する旨提案があった。中村会長の熟慮の結果の尊重、副会長から会長が選ばれるのが望ましいとする意向などから異議なく倉澤洋

氏を次期会長候補に決定した。新副会長候補は倉澤洋氏に一任、次回理事会で決定することになった。なお、全理事がいったん退任することになり、理事の一部交代を検討することになり、若干の候補者を挙げ、さらに次回理事会で検討を加え決定することになった。

第十四回研究会

第十四回研究会は、晴天のもと二月三日東京四ツ谷のプラザエフ（主婦会館）で開催した。参加者は、会員四十五名、一般三十三名の合計七十八名であった。

戸田勝久理事による開会の挨拶の後、高橋忠彦理事の司会により会は進められた。同理事から今回は茶の湯から離れて「紅茶文化」を中心にテーマをした旨の説明があった。そして本年一月十七日に急逝された布目潮瀨先生への追悼の辞が述べられ、『茶道古典全集』第一巻に収められた「茶経」以来、中国における喫茶の歴史の研究に生涯を捧げられた先生の功績に対し、惜しみない賛辞が贈られた。

報告と講演の概要は次のとおり。

ティーガーデンの文化史

滝口 明子

十八世紀ロンドンのティーガーデンは、都市に住む中上流階層の人々の憩いの場として重要な役割を果たし、イギリスにおける喫茶風習定着過程でも独特の位置を占めている。

一六六一年に庭園として出発したヴォクソールは遊園地の元祖ともされるが、一七三二年にティーガーデンとなった。ここでは男女共にティーを飲み、庭園を散歩し、音楽や花火、夜間照明、軽食などを楽しんだ。他に大きなところでは、直径四十六メートルの円形大会場の誇ったラニラー、美味しいケーキが売られるメリルボーンなどがあったが、労働者の



一週間の賃金が十シリングほどの時代に、入場料は一シリング、ティーにバター付きパンだと二シリング六ペンスもした。

このティーガーデンの出現は、イギリスにおいて喫茶の習慣をひろめ、茶の消費量も急速に増加した。少し前に出現したコーヒーハウスが、政治家や経済人という男達のサロンであったのに対し、男女共に遊び楽しむ憩いの場として機能した。十八世紀後半に最盛期を迎えたティーガーデンも、風紀の乱れなどにより、十九世紀半ばにはその姿を消すことになる。

講演

ラブサン・スーチョンとアール・グレイ

磯淵 猛

イギリス人に好きな紅茶はと尋ねると、必ずと言っていいほど、「アール・グレイ」という答えが返ってくる。しかし、これは彼らの建前である。本当はブレンドティーを飲んでいてもこう答える。これは彼の地の人たちのアンティーク趣味によつてにほかならない。アールグレイは、緑茶に練香を混ぜたような味と香りがすると表現しても、決して言い過ぎではないものである。さてアール・グ

レイはイギリスのトワイニング家では自家が製造したと主張するが、実際は海軍大臣や外務大臣を歴任し、総理大臣を務めたグレイ伯爵によるものが大きい。伯爵が外相時代に中国に送った使節団のお土産の中国茶をいたく気に入り、トワイニング家にこのような茶が造れないかと、注文したのがそのはじまりのように思われる。注文を受けたトワイニング家では伯爵の言うような茶葉が入手できず、やむを得ず手に入りやすかった中国茶に、シチリア産のベルガモットの香りを吹き付け製造したのがアール・グレイである。このようにしてできた紅茶であるが、イギリス人のアンティーク好きにより、建前では最も好きな紅茶になる。この紅茶は強烈な味と香りが薄めても残り、冷やしても濁らないため、アイス・ティーに向いている。

ところで、現在中国からもたらされる紅茶に、ラブサン・スーチョンと呼ばれる、福建省武夷山を産地とするものがある。これは現地では正山小種（せいざんしょうじゆ）といつて、茶葉より造られるものだが、その製造過程において松柏の香りが付いてしまいそれによつて強烈な香と味を持つものである。その味と香りは、胃腸薬のせいりる丸を二二三

代文学はハイカラなものの象徴のように取り上げられている。漱石も紅茶に対しては、評価がガラリと変わり、代表作の一つである『それから』においても、当時の日本が憧れていた西欧文化の日常的表現として紅茶を描いている。他にも例を挙げると、泉鏡花の『湯島詣』には、西欧近代を移し替えたような世界にいる人たちと、捉えられていた帝国大学の卒業生達の飲み物として、彼らの知的レベルを象徴するものとして紅茶が存在する。永井荷風の『紅茶の後』の序では、

タイトルとは裏腹に日本の近代への絶望の一方、西欧近代を呼び覚ますものとして紅茶が使われている。ところで、紅茶は第二次世界大戦前には、庶民階級にとつて無縁なものであったのか。野坂昭如の『アメリカひじき』を読むと「黒い糸屑」のような「ひじき」として紅茶が出てくる。ここでは焼け跡に建てられた壕舎の住人が、紅茶の茶葉というものに全く無知であったことに端を発するエピソードが描かれるのであった。

さて、正岡子規の『仰臥漫録』は公開を前提にせず執筆されたものであるが、それだけにそこには最晩年の子規の姿が投影されており、自ら生の再構築をはかる子規の姿を見る

ことが出来るものである。ここには死の病の床に臥す病人の日常が記述されているわけであるが、三食はもちろん、間食になにを食べたかまで詳細に書き綴られている。それは子規自身の生きる意志、生への情熱が食べ物に現れていると言つてもいいものである。子規にとつて、食ることが生の証なのであった。

その中に見える「紅茶」は、すこしでも贅沢をしたいという子規の意思のあらわれであり、子規の西欧近代へのあこがれの象徴でもあったといえよう。



高知例会

森田久右衛門日記について

小松 聡

土佐藩家尾戸焼は特にその初期製品の殆どが武家への贈答に用いられたと言われ、江戸期における流通については個々の伝世品より遡求するのみで、概観を得ることの出来る纏まった資料はほとんどない。本発表者はこの江戸期尾戸焼の流通に興味を持つが、尾戸窯二代森田久右衛門が残した所謂『森田久右衛門江戸日記』のコピーを入手することが出来

粒お湯に溶かしたようなものといつてよい。ただし、ロンドンの石灰質の水で入れるとマイルドな味になり、茶請けとしてスモーク・サーモンのサンドイッチが地元ロンドンでは喜ばれている。これは燻したものは燻したものが合うという単純な理由からで、それ以上の意味はないと思われる。

一方アール・グレイもロンドンの水で入れると、ライトな味になる。実はグレイ伯爵が中国土産にもらった中国の茶とは福建省武夷山で自生する正山小種ではなかったか。そうであるならば、アール・グレイとラブサン・スーチョンは同じ茶葉であったといえよう。

近代文学における『茶』の意味

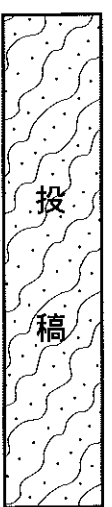
山田 有策

近代文学における茶、特に紅茶のイメージを追ってみたい。というのも、近代文学において、「茶」はあまり良いイメージを持たれていない。たとえば文豪夏目漱石の作品でも、漱石自身が胃弱であったためか、イメージは悪い。『坊っちゃん』では坊っちゃんも、苦い茶が嫌いな人物として描かれているし、『琴のそら音』でも飲みたくないものとして茶が登場する。一方、紅茶について日本の近

たことから、研究の端緒として日記の精読を試みることにした。

『森田久右衛門江戸日記』は、一陶工が藩命により各地の窯を見学しつつ、江戸では幕府重臣の面前で作陶するという異例の道程について認めたものであり、江戸初期の各地窯業の一端を垣間見させる貴重な資料としてつとに有名である。すでに東洋陶磁学会により完結した釈読がついているが、旅日記であることからその記述は当時の文物に至り、窯業のみならず多方面に史料価値があると考える。

そこで今回の再読作業は日記を電子文書化すること、さらに従来言及の無かった箇所までに詳細に注釈することを旨とし、その作業概要を説明し、具体的な作業を始めることを提案した。今後は、最終的に自由な閲覧・情報更新と、他分野との相互参照を目指して作業を進めていく。全国の会員にも協力を得たい。



茶色と茶の色について

山田新市

○茶色と茶染めについて

茶色は茶の色なのかという発言は、シンプジウムなどでこれまで何度か出されているが、その都度、明快な回答は出されてきていないようである。熊倉功夫氏によれば「茶色」という言葉は：平安時代にも出てくる（『世界お茶フォーラム』論文集）由だが、浅学のため筆者はまだそれを確認していない。しかし若干の調査はしたので、その結果を以下にとりあえずの形で報告することにする。

「黒味を帯びた赤黄色」（時代別国語事典・室町時代）である「茶色」が「茶」の色からの色名であることは疑いようがない。しかし問題は「茶」がどんな茶なのかにかかっていよう。同じ「茶」といっても、①茶葉、②煎汁、③茶の木など、いずれも「茶」の名で通用しているのは周知の通りだが、①も②も茶褐色系から緑色系まで多様である。③は当然緑色系だが実際的ではない。茶色はブラウン系の色の総称だからである。

事・辞典類は多く「茶を煮出したような色」「茶の汁で染め出した色」「茶葉を蒸して使う茶染めの色」（角川古語大辞典など）としているが、色として安定していることが色名の前提だとすれば、淹れ方や点て方によ

の言う建久二（一一九二）年の三〇年あまり前のことになる。

このことについてただ一つだけ感想を述べるとすれば、茶はすでにこの時点で、飲用ではない別の用途に用いられていたことになる。「兵範記」の場合も「山槐記」の場合も、茶はすでに一種のファッションとして活用されていたのである。茶が唐の文化のシンボルとして移入されたとする説に従うにしても、飲用ではなく草木染めの材料に使ってしまうほどあり余っていたのかどうか、それともそれだけ格が落ちていたのかどうか、いささか疑問に思わざるを得ない。あるいはこのファッションにはもつと別な茶が使われていたのではないかとも思うが、本題ではないからこれ以上立ち入るのはやめよう。

ところで茶色そのものについては、九鬼周造にも茶色を（いき）の色（「いき」の構造）とする記述があるが、茶色の色は江戸に入っで一気に増えている。蛇足めくが、現代の色名帳から抜き書きしれ九十三種をあげておこう。同色の重複名もあるが、こだわらない。「抹茶色」（これは薄緑系だろうか）などというのまで茶色に入れているのも、愛嬌と言えば愛嬌であろうか。

つて色調がちがってくる②の意でないことは察しがっこう。また冠位十二階の色なども染め（草木染）の色であることを考えれば、事・辞典類の記述はほぼ妥当だと言つてよい。そこで右の記述を手がかりに、茶染めに関する記録を探索した結果は以下の通りである。

○茶染めについての文献記述

◆兵範記（平信範日記）における記述

保元三年十月十九日／今日可有乗船浮遊御会云々、依仰早且参寺家、頃之御幸、上皇召唐綺御直衣等、調懸小松殿御装束也、公卿以下皆着水干装束、御船等、如一昨臘儲之、本堂北弘廂着御車、殿下令候給、御冠、次召御船、殿下以下公卿七人被召御船、殿上人乗船相従、下北面者主水正基仲、左衛門大夫實俊以下、乘高屋形追従、御船令昇河上給之間、遊女三艘、自井堰辺参会：船中有宴飲事、風流破子、珍菓美酒、：公卿以下着饌座、盃酌数巡、入夜分散了：皇太后宮權大夫、紺水干葛布袴、摺之、紅衣／皇后宮大夫、葛紺狩襖、末濃袴、紅衣／左兵衛督、単袴、狩衣、不覺：／右衛門権佐貞憲、茶染狩襖袴、一斤染衣（以下略）（傍点山田）

◆山槐記（中山忠親日記）における記述

相濟茶 藍墨茶 藍砥茶 藍海松茶
青茶色 小豆茶 威光茶 岩井茶 鶯茶
薄茶 梅茶 江戸茶 海老茶 葡萄茶
翁茶 御納戸茶 御召茶 柿茶 樺茶 唐茶
観世茶 黄枯茶 紀州茶 黄海松茶 媚茶
昆布茶 信染茶 芝甑茶 市紅茶 渋茶
狸々茶 白茶 沈香茶 新斎茶 煤竹茶
雀茶 素海松茶 伽羅茶 金茶 栗梅茶
栗金茶 栗皮茶 黒茶 桑色白茶
桑茶 憲法黒茶 光悦茶 木枯茶 極焦茶
焦茶 千歳茶 煎じ茶色 宗伝唐茶 宝茶
丹柄茶 団十郎茶 茶色 茶褐色 茶氣鼠
茶鼠 茶微塵茶 丁字茶 当世茶 鴉唐茶
鴉茶 礪茶 沈香茶 鷹茶 納戸茶 鼠茶
梅幸茶 鷗茶 山吹茶 狸虎茶 蘭茶
璃寛茶 利休白茶 利休茶 利休色
緑茶色 路考茶 福寿茶 古茶 文人茶
抹茶色 豆殻茶 蜜柑茶 海松茶 昔唐茶
百塩茶 桃山茶 柳煤竹茶 柳茶

注

平信範 天永三（一一二二）年〜文治三（一一八七）年。平安後期の官人、公卿。
中山忠親 長承一（一一三二）年〜建久六（一一九五）年。平安鎌倉時代の朝臣。内大臣。

治承三年三月三日／今日宇治一切経会也、殿下並北政所令入給、日未出々御、遅参人多云々、伝聞先政所御耳、庇、後殿下出御、車副六人賜当色、白張平礼、殿上人諸大夫、左中将清通朝臣隨身帶劍、右少将頼家朝臣隨身狩胡篋、右（左）衛門権佐光長茶染一斤染立烏帽子、蒔絵野剣、弘尻鞆、鼠尻尖形：（以下略）（傍点山田）

◆久政茶会記における記述

蓮花王大ツボ：薬アマリ黄ニモナク、又ク口過モセズ、ヲ、イ茶色小織物、口の緒クロ茶（天正十六・十二・二二）（傍点山田）
この他、太平記にも「地黒に茶染めの直垂」（巻四十）の記述があるが、「兵範記」のそれが茶染めについての初見かどうかはお断じがたい。「茶色は：平安時代にも出てくる」とされた熊倉氏のご教示を得たいところである。

●茶と茶染めについて

保元三年は西暦で一一五八年、治承三年は一一七九年である。「兵範記」のそれがかりに茶染めの初見ではないにしても、茶の初見とされる『日本後紀』弘仁六（八一五）年からすると三四〇年あまり後、榮西茶種招来説

一斤染 染め物の名。薄い紅色。「檢非違使」に來月一日より火色を制止す可きの由仰す。但し紅花大一斤を以て絹一疋を染むるの色と為す」（日本紀略）。「一斤とは紅花大一斤を以て一匹の絹を染たるを云なり」（貞丈雜記五）



例会のご案内

東京例会

次の日程で開催します。会場は東京芸術大学（東京都台東区上野公園）です。ふるつてご参加ください。

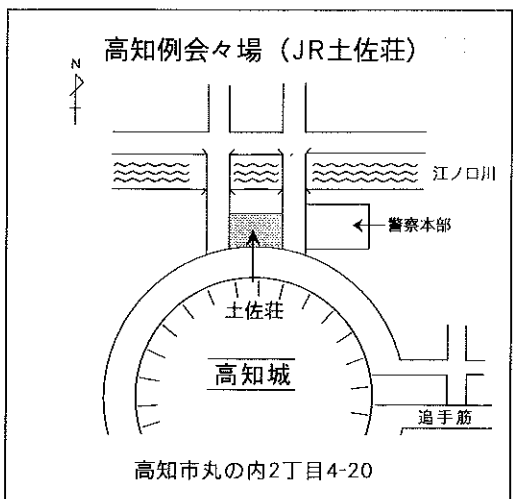
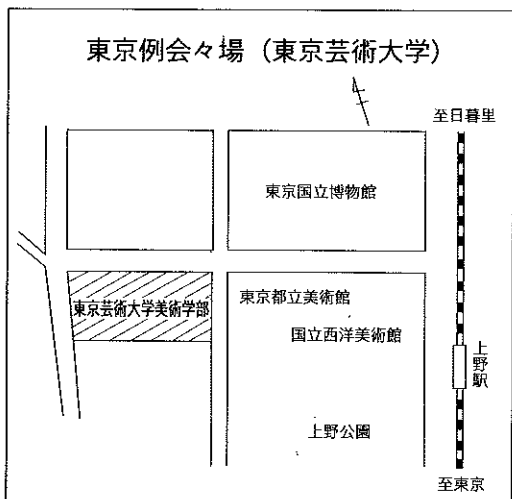
- 五月二十六日（土）午後一時から「芦屋釜と京釜」 原田一敏氏
- 七月二十八日（土）午後一時から「川柳茶湯考（二）」 村上瑛二郎氏
- 「上総国久留里藩と土屋蔵帳」 小倉光夫氏

高知例会

次の日程で開催します。会場はJ.R土佐荘（高知市丸ノ内）です。多数の参加をお待ちしています。

- 九月二日（日）十時から「森田久右衛門日記について（二）」 小松聡氏

後記



*昨年度の事業は終了しましたので、この会報で終えた事業のすべてについてご報告を終わる予定でしたが、三月に開催した近畿例会の報告だけは載せることができませんでした。編集者の怠慢がその大きな理由ですが、機械への過信もその理由の一つです。前回はコンピュータに泣かされ、今回はラジカセに泣かされました。機械を使わないうわけにもいかず難しいことです。次号で必ずお二人の若々しい発表の要旨を読んでもいただきます。

*山田新市さんの原稿はかなり前にいただいていましたのですが、やっと掲載することができました。研究の成果を発表する所としてはまず会誌があるのですが、もう少し気軽に成果を発表する所として会報を利用していただきたいと思えます。

*方々に中国茶を飲ませる喫茶店が開店し、日本茶を飲ませる喫茶店も出来はじめていると聞きます。編集者はこの日本茶を飲ませる喫茶店を見たことがあります。興味を引かれます。どんな層の人たちが利用しているのでしょうか。茶店の復活とでも

呼びたいこの現象が広まってほしいものです。日本茶を飲ませる喫茶店の普及は、結果として日本茶のさらなる個性化を求めるようになるように思えます。いかがでしょうか。ペットボトル入りの日本茶も、順調に売り上げを伸ばしているとか。茶業が盛んになり、その結果学会の底辺がどんどん広がることを期待せずにはおられません。

*榎本さんが紹介してくださった「伝統と革新萩焼四〇〇年」展は、東京、神戸での展覧を終え、六月十六日から七月二十二日まで地元山口県萩市にある山口県立萩美術館・浦上記念館で開催されます。これまでの萩焼展とは少し違った切り口が期待されます。

*例会のお知らせは会報によることになっており、特別な場合を除いて改めてのご案内はいたしませんのでご注意ください。

*今年度は役員改選の年にあたります。編集子の仕事もこれで一区切りつきました。会報について何かお気づきの点が在れば、お知らせいただければ幸いです。

*すでにお知らせがいつていますが、今月二十七日に総会を行います。京都でお目に掛かりましょう。